

Ⅱ これからの地域を支える近隣助け合い活動—おとなりさんネットワーク「えん」 8年の活動から見えてきた地域づくり

おとなりさんネットワーク「えん」 田代 久美枝

1 はじめに

■おとなりさんネットワーク「えん」は・・・

「年を取って、一人ポッチは辛いね。仲間と一緒に、何か少しでも人の役に立つ人生を送りたいね」というメンバーの声で「えん」を作って8年になります。ご近所さんのメンバーがあつまって「安心・安全な街づくり・ずっとここで暮らし続けられる地域づくりを自分達がやろう。地域の福祉力に自分達になろう」を目標に活動している「近隣助け合い活動」のグループです。2001年に12名の理事ではじめ、現在40名ほどのメンバーで、次のような活動をしています。

ボランティア活動—特養「春吉園」の洗濯ボランティア、毎週2回

障害者の生活自立支援のためのフリーマーケット「おとなりさんショップ」開催

地域コーディネート活動—地域の世話焼きさんの後押し。

他団体との交流・参加—北九州NPO研究交流会、認知症・草の根ネットワーク、

ボランティア連絡協議会等に参加したり事務局を担当している。

居場所づくり「火曜日の会」の開催—毎週火曜日に個人宅を開放し、居場所づくりの会を開催。毎回15～20人の参加がある。

学習活動「えんの会」開催—2ヶ月に1回、いろんな分野のお客様をお呼びして現場発かつ最新の情報をいただいている。目からウロコの経験をする事が多く、参加者に喜ばれている。

組織運営としては理事会をおき（現在10名の理事）、年間4回ほどの理事会をひらいて、活動方針を決定し、4月に総会を開催しています。

日常的には、火曜日の会の担当、高齢者ボランティア、障害者ボランティアの担当を置き、広報紙「おきそい・れたー」を必要に応じて発行しています。

■「えん」設立のきっかけは・・・

永年つきあってきたメンバーが皆50代に入り、親の介護、子どもの自立、夫のリストラ、自分達の健康に関する不安と生きがいの問題など、個人的ではありながら、社会と密接に絡んだ問題を抱えていました。それを外に出して話し合ったとき、なんだ自分だけではないのか。では皆で勉強しながら、何か行動すれば、解決にむすびつけることができるのではないかと考えたのがきっかけでした。

様々な問題を抱えながら、「親の介護はしているけれど、さて自分達の老後は？」「自分達の最終章をどのように良いものにしていったらよいのか」そのイメージがつかめないことに一層な不安を抱えていました。

最後の姿がどうありたいのか・・勿論、「最後まで誰かに必要とされる人でありたい」「自分が住んでいるここで、最後まで居場所・行く場所・座る場所が欲しい」とのぞんでいるのですが。さて、そういう希望がかなえられる社会状況があるのか心もとない。また、一番身近な私たちを取り巻く地域の状況は？どんな人がいて、どんな問題をかかえているのか？

子育て、障害者、高齢者、消費者問題など、メンバーはそれぞれ（課題型の）市民活動をしている人たちでしたが、では地域の状況はどんなものかということをお案外つかめていなかったのです。

活動を始めるにあたって、出てきたのが、私たちが「知らない」ということでした。ではまず、あちこち出かけていって、お付き合いをしながら、「知ること」から始めよう。地域の何に安心出来ないのか、良い最終章をむかえるためにはどういう条件整備をしないと行けないのか、「現在」をつかんで、「こうありたい未来のイメージ」と「それを実現させる具体的な取り組みは何か」をあきらかにしようと取り組んでいます。毎年の活動方針のなかに学習プログラムを大きく組むのも、少数の人だけが状況をわかるのではなく、メンバー皆が地域や社会などの周辺状況を知らなければ、問題解決に必要な行動がとれないと考えているからです。またメンバー一人一人がグループの担い手として活動することで、出会った人から学び、「地域で何をしないと行けないのか」という課題がしだいに明確になってきました。その大きな課題の一つが「認知症」の取り組みです。

2 活動の内容

■居場所づくり「火曜日の会」

「えん」の中核の活動に火曜日の会があります。毎週火曜日に個人の自宅を開放して開催しています。火曜日の会は居場所づくりではじめました。手づくりの小物を作りながら、色々な話かとびかいますが、時には深刻な相談も出てきます。不思議なことに手をうごかしながらだと深刻な話もサラッとなって、メンバーのなかから、「私も経験者よ」というアドバイスが出てきます。ピュアカウンセリングです。手作りをしないで、食べる専門の人（手作りお菓子と昼食がでます）もいれば、おしゃべりだけを楽しんでいる人もいます。

「えん」の意味をよく聞かれますが、ご縁（仲間やネットワーク）、円（お金、活動資金作り、メンバーへの活動費還元）、終焉（死ぬまでということ）など色々考えられますが、今、一番大事にしているのは「宴会」のエンです。共に食べることはとても大事です。一緒に食べることを通じて仲間としての絆を感じることができます。

また、メンバーにはいろんな経歴の人がいますので、（近頃は男性メンバーも増え、幅広い意見が聞けます）情報交換が行なわれたり、目からウロコの勉強会ができたりと付録がたくさんです。昨年からは皆で認知症について学び、認知症サポーターになりました。

火曜日のメンバーは特養「春吉園」のお洗濯ボランティアや「えん」が開催している障害者支援「おとなりさんショップ」のボランティアでもあります。実践の場をもっているせいか、学習することにとっても意欲的です（しかし、障害者自立支援法の影響でおとなりさんショップの開催がむつかしくなるなどの問題にも遭遇しています）。

■居場所づくりのひろがり

火曜日の会に関心をもって見学にこられる方が多く、ほんとにこういう場が必要だと思われるようですが、なかなか自分で始めるところまではいきません。近所付き合いの煩わしさや面倒なという垣根を超えるのが難しいのでしょうか。それと運営を支えるのに必要な仲間数人を見つけられないという問題もあるようです。特に自宅を開放する場合は家族の理解がないとやっていけません、そのなかでも夫がボランティア活動を理解してくれないと最初からあきらめるかたも多いのです。

また、うつ症状の方や認知症の初期の方やその家族のかたから行きたいのだけどという要望をうけることもあります、やはり場所が遠いと継続が難しく、近くにあればという声を聞きます。(認知症初期の方のうち多くのかたがデイサービスなど介護保険利用ではなく、一般の集りのなかに入ることを望まれます) 認知症もうつも閉じこもりを防げば、ある程度悪化を防ぐことができるので、私たちとしても残念な思いです。

北九州市のなかでも相当数「居場所づくり」の活動をしているグループがあるはずなのですが、市民センターなどで行なわれている以外はその活動と数がはっきりしません。

今後、「えん」「認知症・草の根ネットワーク」のメンバーと共に、居場所づくりグループがどれくらいあり、どのような形で活動しているのか研究してみようと考えています。

■火曜日の会に認知症のかたの参加が多くなってきました。

もともとメンバーの絆を深めるために始めた火曜日の会でしたが、「えん」1年目に「私はウツ病です」と公表したメンバーがいたことが後の「えん」の方向性を決めたようです。最初の1年はウツのメンバーとの付き合いはたいへんでしたが、本人がその時々々の病状を正直に言うことでたくさんのかたの事を学びました。その後、ウツや認知症の人たちが「えん」に参加することが多くなっていくのですが、この最初の経験から、ウツや認知症を病気と認識することの大事さ(とくに家族の姿勢が重要)、病気を隠さないこと、病気のことを正しく知る努力をすること、誰でもいつか病気になるということを「わかる」ことが必要であることなどを教えられました。

現在ご夫婦のどちらかがアルツハイマーのかたが3組こられています。認知症のあらわれかたは人様々です。この方達とご一緒に思うのは、認知症ご本人だけではなく、介護をしているかたへの支援が必要だということです。特に奥様の方が発症されている場合、なれない家事などのこともあり、夫の負担は相当の物になります。また介護者は将来の介護がどのようなものになっていくのだろうという不安や孤立感を感じており、そういう点でも介護者に対するきめ細かな支援が必要だと思うのですが、現在の介護保険では家族—介護者の支援は入っていませんので、本人、介護者が「共倒れ」になる危険性を非常に感じています。

21世紀は「人権」の世紀だといわれています。認知症になっても、病気に耐えるというだけでなく、元気な人が様々なところで生活を楽しんでいるように、認知症の人でもデイサービスだけでなく、いろんな場所や集りのなかで様々な人とのふれあいのなかで豊かな生活ができればと思います。そのためにも認知症に対する理解の広がり、居場所の増加が必要であると考えています。

■認知症・草の根ネットワークへの参加

昨年から医師、介護事業者、市民活動メンバー、行政、研究者など多様な人たちがあつまって、「認知症・草の根ネットワーク」の活動が始まり、平成20年7月に正式組織としてスタートしました。認知症の人の思いを真ん中に、認知症になっても安心して暮らせる街づくりをしようというのが趣旨です。

「今日の仲間のために、明日の自分のために」を合い言葉に、最新の生きた情報や現場発の共感を呼ぶ情報発信をおこなっていますが、「目からうろこ」といって参加してくださる方が多くいます。そして思いかけず、「認知症」というキーワードで子どもから高齢者まで、またいろんな分野の方達が多様にかかわりを持つ環が出来はじめました。

「えん」でも認知症を学び、認知症のかたがメンバーにいるという関係で、この認知症・草の根ネットワークに積極的に参加しています。このネットワークをつうじたお付き合いのなかで、「えん」に通われていた認知症のかたがデイサービスを利用したり、グループホームのかたが火曜日の会に遊びにこられたり、「えん」からグループホームにボランティアに行ったりという地域のなかでの交流がはじまっています。

周りの人が正しく認知症を理解していれば、私たちのようなグループでも認知症の人の受け入れは可能です。さらに専門職との連携がはかれれば、認知症のかたとその介護のかたとにとって良い環境を提供できると思います。

■他団体との交流・連携を大事にしています。

「認知症・草の根ネットワーク」との連携もそうですが、他の団体との交流や連携は「えん」の大事な課題として取り組んでいます。

「えん」の会員として一仲間としての絆をふかめるのはいいのですが、他の人から見たときに仲良しさんが固まっていて、そのなかに入れないと感じる組織にしてはいけない、開かれた組織にしようというのが「えん」として合意された考え方です。開かれた組織にするためには他の団体の活動に参加するのが一番わかりやすい方法ですので、あちこちの団体と交流させて頂いています。

「えん」のメンバーが他の団体に参加することによって、いろんな情報を得ることができ、それを「えん」に還元することで、「えん」の活動が多様化し、豊かになっています。開かれた組織になろうと努力することが結果として「えん」というグループが継続することを助けてくれているように感じます。

3 活動の成果とこれからの課題

■無関心の克服・生活文化を変える。

「えん」をつくって8年目、社会の状況は益々不安の度合いを深めてきました。介護保健が施行されて、私たちの老後はこれで大丈夫と喜んだのもつかのま、選択できる老後はまだ遠い夢です。介護、年金、医療といった社会保証制度の穴がますます大きくなっています。その上に格差社会や若い人たちの労働形態の問題も非常に重い課題となっています。派遣に象徴される非正規のはたらきかたが大きな社会問題となっています。これは年金世代の人たちには「自分達に関係のないこと」と、反応が鈍いですが、とんでもない間違いです。介護費用を誰が荷なうのかとい

う狭い問題をかんがえただけでも自分達に関係のないことでは無いとわかります。

今や「私に関係のない事柄」など無いと考えた方が良いでしょうと思います。

7年前に北九州市の企画に「地域づくり勉強会」というのがあり、地域づくりの調査活動をしました。その時からかかっていた各世代共通のコミュニケーション障害は相変わらず解消の糸口が見えず、「誰かがやってくれる」という人まかせや「私には関係ないわ」という無関心がまだまだ幅を利かせています。私たちが地域で安心・安全に暮らし続ける為には、高度成長期の競争社会のなかでわたしたちが身につけてしまった無関心や無責任・個人主義といった生活文化を変えるという難しい作業が残っているのです。

「えん」の活動を通じて、「他の人を理解しようとしなければ、自分のことも理解してもらえない」という実感を持ってもらい、地域の問題解決が他の人のためだけではなく、回りまわって、自分のためになるということを受容し、行動をはじめると増やしたいと思っています。これが本当に難しいのですが。

■マンパワーの不足

ボランティア活動をやっている、よくいわれるのが、「よくやるわね〜」「たいへんね」ではないかと思えます。私たちの暮らしの安心や命の安全を守るというセーフティネットに大きな穴があきはじめている状況を話しても、自分とそれらの問題は別物という根拠のない自信をもたれている人たちが多くいます。私たちがのりこえなければならぬ最強の言葉が「何で、私がそんなことをしないとイケないの」という言葉です。

「えん」の活動を楽しみながら、上記の言葉を乗り越え、納得してもらえる言葉を私たちがもたなければならぬと思えます。公助が厳しくしぼりこまれるなかで、一緒に課題に向き合ってくれる人たち、一緒に取り組んでくれるひとがたくさん必要です。

北九州市におけるボランティアの数は増えていると言われてはいますが、実感としてはそう増えているように感じません。高齢化も進んでいます。

特にここ2年ほど厳しい経済状況を反映してか、学生ボランティアが減少しているように感じます。団塊の世代が社会貢献に進出するのもあと数年かかりそうで、後しばらくは現在の人数で頑張るしかないようです。

ボランティアは個人の社会貢献であるといえると思えますが、企業の社会貢献の仕方を少し人的な部分に振りわけていただければどうでしょうか。

助成金などのお金の面を企業全体として支援している話はよく聞きますが、社員がボランティア活動することを奨励したり、時間的な配慮をしてくれると、マンパワー不足の解決策の一つになるのではないかと考えます。

■今後重要な地域の掘り起こし

みんなが無関心では社会を作っていけない。みんなが関わりを持とうとしなければ、いい地域づくりはありえない。いい地域がなければ、個人のいい人生もありえない。

北九州市では市民センターなどの設置で区レベルまでの街づくりはできはじめました。

今後の一番大きな問題点は個人のかかわりというレベルでの地域の掘り起こし（人の再発見）です。地域づくりという言葉で自分のことだと思える人がどれくらいいるか、今一番穴があいてい

るのが隣近所の助け合いです。解散の話がでていた婦人会が、メンバーの一人が自分の困った体験を話し、こんな婦人会があったら安心なのにとこのを聞いて、一転皆がやる気になったという例もあります。

「誰のために」「何をやるの」がはっきりすれば、町内は人材の宝庫です。

もう上から下への伝達組織では人はついてきません。深い関わりを避けたいと多くの人が考える町内組織・隣近所のかかわりを新たな物にすることが避けて通れない課題となっています。

組織の上の方で決定され、慣例に従って行動するのではなく、住民一人一人の足もとで、隣近所の人と、問題解決に知恵を絞れる。それが「生意気」でも「分をこえたと叩かれる」のでもなく、課題解決のために仕組みも組織も柔軟に変える事が出来る—そんな町内があればどんなにいいか。若い人もきっと参加してきます。

まずは入り口の第一歩として、民主的な組織運営を学ぶ必要があるように思います。組織運営や情報に長けた市民組織と継続力に優れ経験をつんできた地縁組織が協働できるとすれば、そしてそこに市民主体を徹底した行政が加われば私たちの暮らしを安心できるものにすることが出来るのではないのでしょうか。

■「えん」というグループ活動から、地域という私たちの暮らしのセーフティネットの構築へ。

「近隣助け合い活動」のグループとして、活動している「おとなりさんネットワークえん」ですが、やはり、自治会や自治連合会などの地縁組織といわれる所と縁が薄い感はいなめません。メンバーも町内の役がまわってきても、「えん」のことを話す機会はそう多くないようです。

しかし年をかさねるうちに、町内の方達にも他からの広報で「えん」のことを知っていただけるようになりました。

今後とも町内行事の協力などをつうじて、特別なことをしているのではなく、日常的な助け合いの環をつくっていきこうとしている、そのなかに町内の隣近所の人も入ってほしいのだというメッセージを発信し続けようと考えています。

「えん」の活動を通じて出合った多くの方たちから学んだこと、体験したことを、町内の役員をする時に伝えていくということは有効な手段です。少しずつですが積みかさなれば地域を動かす力になるでしょう。時間はかかりますが。

■居場所づくりの拡大

高齢者の居場所は1年365日、いつでもが理想ですが、今のところ火曜日に1回しか出来ていません。

将来的には近くの町内ふくめて（歩いていける範囲で）月曜日から日曜日まで毎日どこかで居間の開放が行なわれているようにしたいとおもっています。

今年度末に同じ町内でもう1ヶ所開催するように計画しています。

来年始めには小倉北区で1ヶ所予定、若松区でも開設準備をしている人がいます。

少しずつですが、広がりがみられはじめました。

「えん」で今ひとつ考えているのは、できれば、小さな町内の範囲（100軒くらい）が一つの大きなホームとして機能できるような構想が実現できればということです。

一人一人は一軒の家（マンション）にすみながらも、真ん中にある集会所（室）に集り、食事

をしたり楽しんだり、地域や隣の人のために何かをしたり。

町内にはお医者さん、看護婦さん、介護職、いろいろな職能を持った人たちがいます。手助けしていただける専門職にはことかきません。住みなれた自分の家で出来るだけ長く自立して、隣近所の人たちと心をかよわせながら、人生を生ききれば、それはいい地域であり、いい社会と言えると思います。

近頃市民活動のなかで「互酬性」という言葉を聞きます。お互い様の行動をとることで、その関係性を継続・維持することとあります。「お互い様」「関係性」「継続」・・・重要なキーワードであると思います。

参考資料

〈私たちの地域〉

45年前に若松市、戸畑市、八幡市、小倉市、門司市の5市が合併し、現在の若松区、戸畑区、八幡東区、八幡西区、小倉北区、小倉南区、門司区の7区となっているが、旧市から引き継いだ各区の個性をそれぞれもっている。当時は新日本製鉄を中核の産業としていたが、近年、日産などの自動車産業の集積も進んでいる。また、環境汚染を克服した経験から環境問題に力をいれ、環境首都宣言や若松区を中心にエコタウンを建設した。一方、都市機能をもちながら、郊外は緑が多く、住民にとっては住みやすいところである。

住民にとっての地域の拠点として、小学校校区に1ヶ所、市全体で129箇所市民センターを配置している。

北九州市の人口（平成20年8月1日現在）

総数—985,102人（男462,543人 女522,559人 世帯数425,237世帯）

北九州市の高齢者の現状（平成19年9月住民基本台帳）

高齢化率

総人口—985,938人

高齢者人口—（65才以上）—230,108人

高齢化率—23.3% ※政令都市のなかで一番高い高齢化率

要介護認定者—46,727人（65歳以上の高齢者に対する割合12.2%）

認知症高齢者—28,074人（平成19年9月）

※要介護認定者に対する割合 60.1%

高齢化の進展—北九州市の高齢化率の将来推計

平成27年—270,000 29.1% 前期高齢者人口のピーク時

平成32年—276,000 31.4% 高齢者人口（全体）のピーク時

平成37年—267,000 32.2% 後期高齢者人口のピーク時

高齢化に伴う課題

- ・団塊の世代が高齢期を迎える
- ・一人暮らしの高齢者、高齢者のみの
- ・介護予防の促進
- ・在宅介護支援の強化

世帯の増加

- ・ 認知症高齢者の増加
- ・ 介護者の負担の増加
- ・ 家族や地域のつながりの希薄化
- ・ 地域で孤立する高齢者の増加
- ・ 労働力人口の減少
- ・ 価値観や行動様式の多様化

→

- ・ 地域ケアの推進
- ・ 認知症対策の推進
- ・ 高齢者虐待への対応
- ・ 高齢者の見守り体制の確保
- ・ 高齢者の多様な住まいの普及
- ・ 在宅医療の推進
- ・ 生涯現役型ライフスタイル